

皆さんこんばんは。それでは本日、前回に引き続きといいますか「古事記」のお話をさせていただきます。前回「ヤマタノオロチ」の話を聞きたいというリクエストがありましたので、本日は「ヤマタノオロチ」の話を中心にお話していきたいと思っております。

「ヤマタノオロチ」の話は「古事記」の中では比較的よく知られているお話で、皆さんの中にはそれなら知っているという方も多いのではないかと思います。私は子供の頃には絵本等で結構「古事記」の中のお話というのは知っていましたが、最近の学生に聞きますと「ヤマタノオロチ」はもとより、「因幡の白兎」も何も知らないという学生の方が多いです。これは大人のひとに言うと驚かれる方もいらっしゃると思いますが、ほとんど神話については今の若い人には情報は入っていないというのが現状でございます。それでもこの会ではそういう話をさせていただけるので、私は嬉しいなと思っております。

現存する日本最古の書物ですが、「古事記」は前回も申しましたが西暦712年に成立した書物でございます。この中の「ヤマタノオロチ」は「古事記」の「古事記」は三巻ありますが上巻の神様の時代の話の中に含まれております。この中で主人公を務めるのはひとは須佐之男命(スサノオノミコト)という神様です。スサノオというのも多分皆様はお聞きになったことがあるのではないのでしょうか。スサノオというのは「古事記」と同時代に書かれました「日本書紀」の両方に出てくる神様ですが、語られ方はやや違っています。本日は「古事記」の方のお話をしていきたいと思っております。

スサノオは産まれた神様なのです。日本の神様の中には誰からも産まれずパッと出現したという神様もいますし、神様と神様が結婚してそのお母様である神様のお腹から産まれたという神様もいるんですが、スサノオはイザナギとイザナミの神様から産まれたと「日本書紀」には書かれています。けれども「古事記」ではイザナギという男の神様から産まれたことになっています。男なのに何故子供を産むのか？その辺は面白いお話になるのですが、そこまで話していると本日いただいた30分は、多分そちらの話で終わってしまいますので、それは「古事記」ではそういうことになっていますということで本日は割愛させていただきます。

スサノオは一人で産まれたわけではないのです。スサノオが産まれた時に、お兄様とお姉様がほぼ同時に産まれています。このお姉様は天照大神(アマテラスオオミカミ)とおっしゃる神様で、今、伊勢神宮に祀られていらっしゃる女神様です。お兄様は月読命(ツクヨミノミコト)といまして月の神様とか暦の神様といわれています。三番目に生まれたのがスサノオです。「日本書紀」ではアマテラス、ツクヨム、スサノオが産まれた時にイザナギ、イザナミの神様が喜ばれて、沢山の子供を産んできたけれども、最も尊い子供が産まれたと喜ばれたとあります。その時に「古事記」の方ですが、イザナギの神様(お父様)が天照大神と月読命には「そなた達、天上世界に行って天上世界を治めなさい」と仰います。特に天照大神には伊装諾尊(イザナギノミコト)は自分の首にかけていた首飾りを渡して「おまえは天上世界である高天原を支配せよ」と仰って、そこで天照大神は全ての日本の神々の頂点に立つ神様ということになるわけですが、その時に須佐之男命(スサノオノミコト)には「古事記」に出てくるのですが、「海の世界を治めよ」と。そうするとお兄さんとお姉さんは大変よい子供で、天照大神と月読命はわかりましたと言って天上世界へ上って行った。スサノオはおとなしく海の世界を治めるかと思いきや、イヤだと言ってだだをこねるのです。スサノオはお母様のいらした「根之堅州國(ネノカタスクニ)」に行きたいと言って泣くのです。「根之堅州國(ネノカタスクニ)」とは一体何処なのかというと、これはまた面倒くさい話になるんですが、「古事記」の中にはいろいろな説があります。実はお母様の伊奘冉尊(イザナミノミコト)はその時、「黄泉(ヨ

ミ)の国」というところにいらっしゃるんです。つまり神様ですがお亡くなりになり「黄泉の国」にいる。だからスサノオがお母様のいる「根之堅州國(ネノカタスクニ)」に行きたいというのは『古事記』の中では話に齟齬が生じている部分なのです。けれども『古事記』は「根之堅州國(ネノカタスクニ)」と「黄泉の国」というのをどうも同じような世界というふうに読み手に思わせようと思っ
ているらしく、それでスサノオが母親のいる「根之堅州國(ネノカタスクニ)」に行くんだ、行くんだと言って泣く。そうすると神様ですからスサノオが泣くと海や川の水は干上がって青々とした山々は枯れ果ててしまったというんです。父親であるイザナギは大変お怒りになって「それならお前は何処へでも行け、この世からおまえなんか追放だ！」とお父さんに言われる。そこでイザナギは日本の神話から退場なさるのです。

一方はスサノオは、じゃあ好きにすると。その時、神様のトップにいらっしゃるのはお姉様の天照大神ですので、お姉様をお願いして「根之堅州國(ネノカタスクニ)」に行くのだと天上世界に上って行く。そうするとスサノオノミコトというのは嵐の神とも言われていまして、彼が天上世界に上って行くと大地は揺れて、天上世界も揺らいで恐ろしい音を立てて何か怖いものが上ってくるような状態になる。高天原にいる天照大神はこれは大変だということで武装して出迎えます。そうするとスサノオは自分に悪い気持ちなんて全然ないんです。ただ「根之堅州國(ネノカタスクニ)」に行きたいだけなので、お姉様、僕の心をわかってくださいと言ってそこで実は様々な駆け引きがあるのです。ここも大変面白いところですが、ここも割愛します。またチャンスがあればお話しします。そして結果としてお姉様はスサノオが天上世界にいることを許す。そうするとスサノオはやった！姉に勝ったということで、天上世界で様々な狼藉を働くんです。どんなことをしたかといいますと、お食事中ですのであまり言えないことですが、お姉さまの神殿を汚すようなことをしたり、お姉さまの天照大神が機(ハタ)を織らせている天上世界の女官が機を織っている正常な機織りの御殿の屋根を壊して、そこに皮を剥いだ血だらけの馬を投げ込むというような恐ろしいことをする。けれども天照大神というのは世界的に見ても神々のパンテオンのトップにいる神様なんですけれども、凄く優しい神様なのです。

普通は自分のテリトリーで乱暴狼藉が働かれた場合には、いくら神様でも厳しい罰を加えるのが普通ですが罰は加えない。そしてお姉様は「天岩屋戸(アマノイワヤト)」という洞窟にこもってしまわれる。天照大神は太陽の女神様ですからお姉様が洞窟にこもってしまうと日食のような現象になり、世の中が真っ暗闇になってしまう。そこで天上世界の神々がみんなで相談して、何とか天照大神を「岩屋戸(アマノイワヤト)」から引っ張り出そうと様々な計略を使う。ここも面白いんですが、鏡を使ったり、天鈿女命(アメノウズメ)という女神様がストリップダンスのようなダンスを踊ったりする。とにかくいろいろなことをしてやっと引っ張り出す。

その後スサノオはどうなったかという、おまえなんか追放だということになります。スサノオはお父様からも追放され、天上世界からもいろいろな悪いことをして追放されてしまう。そしてまるで駄々っ子のようなスサノオが降りてくるのが出雲の国なのです。地上に降りてくる。途中でいろいろな別なこともするんですが、とにかく山の麓に降りてくるんです。その山に降りてきてそこから『古事記』の文章を眺めながらお話ししたいと思います。

出雲の肥河(ヒノカワ)上の鳥髪(トリカミ)というところに下ってきたというんです。ヒノカワというのは古事記の中ではヒカワと書いて肥料の「肥」とサンズイの「河」が書いてあります。けれどもこの川は今は島根県を流れている斐伊川という川であるということがわかっております。その川の川上の山の中にスサノオは降りてくるんです。そうしたら山の中に川が流れている。日本の山というのはどこでも川が流れていて急流であることが多いですが、山の中で迷って流れに突き当たったらどうしたらいいと思いますか？山の中で迷って水の流れを見たら、川を見たら、下流の方に

下りていくのが常識なのですが、スサノオは逆をする。何故かという川上から箸が流れてきたというんです。箸が流れてきたからには上流に誰かがいる、というわけで川を遡って上流の方に行くとならしてそこには村落があってそこに年老いた夫婦と一人の美しい少女が泣いていた。そこでスサノオは「そなたたちは一体誰かね？」と聞きますと、おじいさんが答えるには「私共は国津神(クニツカミ)でオオヤマツミノカミの子供でございます」。オオヤマツミノカミというのは山の神様です。「私の名前はアシナヅチ、妻の名前はテナヅチと申します」。アシナヅチの「アシ」は『古事記』では“Leg”の「足」が書かれています。テナヅチは「手」という字が書いてあり、とっても面白い名前なのです。意味があるのです。「そして娘の名前はクシナダヒメという名前です」と言う。「古事記」の本文ではクシは「櫛」、「名」、「田」と書いてあります。ところが『日本書紀』では違う字が書かれています。それは後ほど。とにかくアシナヅチ、テナヅチ、娘がクシナダヒメ、この3人がさめざめと泣いている。「なんで泣いているのか？」スサノオはまた尋ねます。そうすると「そもそも私共には娘が8人いました。ところがヤマタノオロチという怪物が毎年やってきて娘をひとりずつ食ってしまいました。とうとう残りは末娘一人になってしまった。また今年ヤマタノオロチが来る時期になりましたので、それで今にも食われてしまうのではないかと思い、悲しく思って泣いているのでございます」と訴える。そうするとスサノオは「そのヤマタノオロチはどんな格好なのか？」と聞く。そうすると、おじいさんが詳細に答えるには「目は赤加賀智(アカカガチ)の如く…アカカガチ、「カガチ」というのは「ほおずき」のことです。赤いほおずきのように真っ赤な目をしていて、「身一つに八頭八尾(ヤカシラヤヲ)有り」…胴体は一つだけれども頭が八つ、尾が八つあるんです。…何か変な人たちですね。すわりが悪いですね。私も子供の前でこの話をする事になり、絵を描いてと言われて、うーん、と思ったのですが、あまり格好のいい絵は描けなかった覚えがあるんですが、そういう姿をしている。それだけではなく巨大なんです。「亦(マタ)其の身に蘿(コケ)ち檜栢(ヒスギ)と生(オ)ひ」と。体には「こけ」というのは木に垂れ下がっている蔓植物がありますが、それが「こけ」です。「ひすぎ」とは檜と栢の木。体には檜や栢の木が生い茂っていて、「其の長(タケ)は谿八谷岐八尾(タニヤタニヨヤヲ)」つまりその体の大きさは八つの谷、八つの峰に渡るほどの巨大な大きさである。そんな巨大な怪物が娘一人を食っただけで満足するのかなと思ったものですが、私が最初読んだときに。けれどもそういうお約束になっています。「其の腹を見れば、悉に常に血爛れたり」とあります。そのオロチの腹は全く真っ赤な血に染まっているのです、と言う。一体何の象徴なんだろうということですが、とても面白い姿をしています。そういうものが山を越えてやってくる。そしてクシナダヒメを食べる、というわけなのです。そうするとスサノオはじゃあ、助けてやると言うかと思いきや、何て言ったと思いますか？これはちょっと…と私が読んだときに女性として思いましたが、その時にスサノオは何と言ったかといいますと、「そのお嬢さんを自分にくれますか」とまず聞くのです。もしあげないと言ったらどうするのかなと思います。そうすると面白いことにおじいさん(アシナヅチ)の方も「はい、差し上げます。だから助けて」とは言わないんです。「かしこけれどもみなを知らず」—父親として恐れ多いことでございますから貴方様の意向に沿いたいと思うけれども、あなたの名前がわからない」。つまり氏素性の分からない者には娘はやれない。そういう父親の宣言なんです。1300年前に書かれた本でもそんなことが書かれています。そうするとスサノオは何と言うかという「吾者天照大御神之伊呂勢者也」つまり「伊呂勢」とは同じ母親から産まれた男のきょうだいという意味です。当時は違う母親から産まれる場合もあるのです。父親が一緒でも。そうすると母親の身分によってその子供の身分はちょっと上下するんです。ですから同じ母親から産まれたきょうだいですよ、というのはつまりその同じ母親から産まれたお姉さんである天照大神と私は同じくらい尊いことを言おうとしているんです。自分は天照大神のきょうだいであって—「故今、自天降坐也」—そういうわけで今天上世界から降臨して

きたのである、と言うんです。本当は追放されたんですけれどもそうは言わない。天上世界から降りてきたんですよと言う。そうするとアシナヅチは、そういうことであれば娘は差し上げますと言うんです。そうしたらスサノオは、じゃあ助けてあげましょうと。そこでまずしたことはクシナダヒメを「櫛」に変身させて自分の頭に挿した。それからテナヅチとアシナヅチに言ったことは「汝等、醸八鹽折之酒、亦作廻垣、於其垣作八門、每門結八佐受岐此三字以音、每其佐受岐置酒船而、每船盛其八鹽折酒而待」。「家の周りに垣根を作りなさい。垣根には八つ門を作れ。八つ門を作ったらその門の前にテーブルを置きなさい。そのテーブルごとに酒樽を置け。その酒樽に八鹽折酒(ヤシオオリノサケ：何度も何度も醸して作った強いお酒)を満たして、そして待っていなさい」と言うんです。酒を醸せと言ったら今すぐ出来るはずがないのですが、それでもテナヅチもアシナヅチも神様なのでそういうことをさせる。そして彼らはそれをするのです。そして家の周りに垣根を作り、そこに八つの門を作り、そこに八つの酒船を用意してそこに酒を満たして待ち構えていると果たしてその恐ろしいナリで、言われた通りの姿でヤマタノオロチがやってくる。でもヤマタノオロチは門から入ってくる前に酒樽が置いてあるので、それぞれの八つの首を突っ込んでグビグビと強いお酒を飲んでそのまま寝てしまう。酔っ払って寝っころがって寝てしまった。

そこでスサノオは自分の剣を抜いてポンポン斬っていただけなんです。大変簡単な退治の仕方です。どれほどの武勇があるかと思いきやほとんどがテナヅチ、アシナヅチの功績ではないのかなと思われるような。ただいくら酒があってもスサノオが斬らなければヤマタノオロチが退治できなかったわけですから、これは両者の協力によってヤマタノオロチが見事に退治されるわけなんです。そうするとヒノカワは血になって流れたと。真っ赤になってヒノカワは流れたというふうに書いてあります。でもそれだけではないのです。その後、スサノオの剣でヤマタノオロチの尾を斬っている時に、中ほどの尾を斬った時、中ほどの尾というのはどこらへんの尾なのかと思いますが、8本ある中の真ん中の尾だったのか、長さの真ん中だったのか、それは『古事記』には書いていないのですが、とにかく中ほどの尻尾を切ったときにスサノオの剣が欠けたと言われていました。欠けたのでスサノオはかけらを持って裂いてみると中から立派な剣が出てきたという。これは面白い話なんです。『古事記』はそれだけしか書いていないのですが、ちょっとだけ深読みすると材質は何だったかと思いますが？—鉄なのです。ですからスサノオの持っていた剣は青銅の剣なのです。青銅の武器を持っていた人達というのは鉄の武器を持っている人達に叶わなかったのです。古代なのですが、恐らく青銅の剣を持っていた。鉄剣に当たった時に青銅の剣は割れたんです。でも鉄剣は割れなかった。きれいな形の姿のまま、その尻尾から出てきたのです。これがかの有名な「草薙の剣(クサナギノツルギ)」というものでスサノオはそれをお姉様の天照大神に奉ったと『古事記』には書かれています。その後、スサノオはクシナダヒメと結婚したという話が後に続きます。

スサノオとヤマタノオロチの話はこれだけなのですが、大変面白いのは尻尾から鉄剣が出てきたというところです。ヤマタノオロチの「オロチ」というのはそもそもなんでオロチなのか。大蛇と書いてオロチと読ませているんですが、なんでオロチなのか？ということを考えてみますと、諸説がありますが、一説にはこういうことがあります。「オ」というのは「尻尾」のことなのだ。

「チ」というのは「神」とか「神霊」を指す日本の言葉なのです。これはずっと長い研究史があって研究されているので多分間違いないと思います。「オロチ」というのは「尻尾の神」という意味。考えてみると蛇というのはどこから尻尾なのか、わかりませんよね。だからもしかして蛇というのは「尻尾の神」という名を持っていたかもしれない。その蛇の体から鉄剣が出てきた。とっても面白い話です。それだけではなく、先ほど蹉跎とおっしゃった方がいらっしゃいましたが、実は斐伊川というのは蹉跎の産出がされる川なのです。ですからヤマタノオロチが斬られてヒノカワが血になって流れたというのはヒノカワは蹉跎を産出する川ですから赤くなる。だからこれには古代の

製鉄集団が関わっているのではないかというふうに言われている話でもあるんです。とても面白い話で、それだけではなく、様々なポイントがあります。

例えば娘と両親の話であるとかあるいはオロチ退治の話、鉄剣が出てきた話、そういった話なんですが、更にこの話の中にはひとつの日本の文化を象徴するような話も出てきます。それは箸を捨てていた話です。これは捨てていたから流れてきたのかな？それとも洗っているときに落として流れたのか、どっちかだろうと思いますが、私は多分捨てたんだろうと思います。実は箸の話は益田勝実(マスカツミ)さんという日本の古代文学の研究者がある本にお書きになったとっても面白い話があるんですが、もし自分が冷凍睡眠して例えば 200 年度の世界で目を覚ましたとき、目を覚ましたその場所が日本だと分かる方法がひとつだけある。もしそこに住んでいる人が主に箸を使って食事をとって、そしてその中に使い捨ての箸があったらそれは間違いなく日本であると言うのです。実は箸の使い捨て文化というのは日本特有のものと考えられています。今たぶん世界中でそういうものはあるんだろうと思いますが、もともと日本はそれを持っていました。

今でも私達は今日、割り箸を使っていたいただきましたけれども、例えばこの中には中国、韓国の方もいらっしゃるでしょうし、その文化にお詳しい方もいらっしゃると思いますが、お客様をおもてなしするときには中国では、今はどうかわかりませんが、かつては「象牙の箸」でおもてなしをした。韓国では「銀のお箸」ですよね。でも日本は「白木の箸」でお客様に出す。そういう違いがある。これは何故かという、それはまさに割り箸の使い方にもよりますが、割り箸というのは割らなければ使えないものです。割って使うものですが、それは何を意味しているのかという、あなたがこの箸を使う一番最初の人であなた以前にこの箸を使ったことがありません。あなたのその箸は新品なのですということの意味している。そういうふう考えられる。そういう使い捨ての文化はもともと神様の祀りに新しいものを供えて、そしてそれは一回使ったら廃棄処分する。そういうところからきていると言われています。

例えばお正月飾りもそうです。それは去年や一昨年、どんなに素晴らしい高いお正月飾り、美しいものを買ったとしても、じゃあ来年も再来年も 3 年後も使うかということそんなことはない。お正月の松飾は一年こっきりのものです。そういう文化が日本には根付いていて、例えば平城京の発掘調査報告書を見ますと、実は箸が大量に捨ててあるというような調査報告も出ています。ですからそういった神様にお祀りする箸というのは使い捨て。白木のもので当然使い捨てなので飾りはつけないけれども、常に新しいものを連続して使うことでこれは永遠性を獲得したヨーロッパの石の文化とは違う樹木の文化を持っている日本のひとつの文化なのですが、それがここにも表れています。箸を捨てて、それが川を流れてきたからこそです。これが重たい象牙や銀の箸だったら川は流れません。沈んでしまいます。そうだったからこそ実はスサノオは上に上って行ってヤマタノオロチ退治ができたというお話になります。そういった日本文化の側面もまた垣間見せてくれるお話なのです。

実はもうひとつこのお話に関してはお話したいことがあるのです。それは、こういった日本文化の特徴を備えているお話なんですけれども、実はこのヤマタノオロチの話はものすごくグローバルな広がりを持っているお話なんです。神話学者の間では割と有名な話なのですが、もともと発見したのは日本人ではなくヨーロッパの人で、ハートランドという神話学者なのですが、この人がスサノオがヤマタノオロチを退治するお話というのは、典型的なペルセウス・アンドロメダ型の神話であると言って、それ以外このお話はギリシャ神話のペルセウス・アンドロメダのお話と同様の話と言われています。ペルセウス・アンドロメダ型の話というのはどういう話かと言いますと、ギリシャ神話における英雄ペルセウスが岩に縛りつけられて今にも海の怪物の餌食にされようとしているアンドロメダを見かけてそして彼女を救うというお話なんです。アンドロメダというのはエチオピ

アの王女様で、その父親はケルベウス、お母さんはカシオペアというんですが、あるときお母様のカシオペアは「私は海のニンフよりも美しい」と自分の美を誇ったんです。そしたら海のニンフは怒りましたし、海の神ポセイドンは大変お怒りになって高潮と怪物をエチオピアの国に送ったというんです。そこでケルベウスは自ら進んでではないんですが、預言者に話を聞くと預言者はおまえの娘を海の神にそなえればこれはやむと言われるんです。エチオピアの国民に強いられて王は娘を岩にくくりつけなければならなくなったわけです。そこにたまたま通りかかったペルセウスがそれを見て、そしてアンドロメダの美しさに心を奪われてお嬢さんを私にくださるのなら怪獣退治をしますと言って、見事に怪獣退治をしてアンドロメダと結ばれるというギリシャ神話なのですが、骨格がほとんど一緒だと思われませんか？ペルセウス・アンドロメダ型神話に出てくるのは3つの要素です。つまり生贄の乙女、怪物、若き英雄。まさにこの3つがそろって、三拍子そろった話がギリシャにあってそれがユーラシア大陸を運ばれて、ユーラシア大陸の一番海を隔てた東側にある日本の国まで到達したのであろうというふうに実は神話学の世界では言われています。そういった意味で他にもそういう話があるんですかと聞いたら、実はあります。アジアにもありますし、世界中いろいろなところに分布しています。恐らく若者が何かを達成するには、そして若き乙女というのは豊穡と生産のシンボルですから、人間が豊穡と生産を手に入れるためには様々な怪物を倒さなければならないという人類共通の哲学がそこに込められているのだらうと思いますが、そういった話がこの『古事記』のこの話にも見てとれる。ということでこのお話は日本の文化を代表するお話であるとともに世界的に分布しているペルセウス・アンドロメダ型説話のひとつの典型例でもあるということで、グローバルな広がりを持っているということをお話したいと思って本日参りました。他にもこのお話には様々なポイントがあります。先ほど言いかけてましたけれども、『日本書紀』ではクシナダヒメの漢字はどんな漢字が使われているかということ「奇」：不可思議な、という意味。クシナダヒメは「奇稲田姫」と書きます。櫛に姿を変えられたから『古事記』では「櫛名田姫」と書いてありますが、実はクシイナダヒメというのは稲の田んぼの女神様なのです。稲の田んぼを代表する女神様で、ですからスサノオは稲の田んぼを代表する女神を救った斐伊川の氾濫から救った英雄ということになります。そう思えばクシナダ姫は稲を作る、お米の田んぼの女神様であるからこそ、このお父さんとお母さんはアシナヅチとテナヅチと言うんです。つまり、男の足と女の手が稲田を耕してお米を作る。そしてお米によってお酒も作られる。そしてお酒でもってヤマタノオロチを退治する。

もうひとつ最後に付け加えたいのはこのお話のパターンというのは『古事記』では実は他にも出てきます。どういうパターンかと言うと天上世界からやってきた若き男性が、自分とは違う世界の女性と結ばれる。結ばれるその女性のバックグラウンドにある力を彼はその身に宿してそれと協力して敵を打ち破っていくというパターンなんです。これは実はギリシャ神話のペルセウス・アンドロメダ型神話にはありません。ペルセウス・アンドロメダ型の話では若き英雄であるペルセウスが自分ひとりの力で海の怪獣を倒すんです。けれども日本の場合には若き英雄は必ず妻とする女性の力、もしくはその女性のバックグラウンドにある力と協力して敵に対処して敵を打ち破っていくというお話になっています。そういった意味でも日本の神話はグローバルな広がりを持っている世界共通項の部分と、それから日本独自の部分とふたつながらに兼ね備えているお話ということになります。よろしかったでしょうか。

<閉会点鐘・黒岩会長>

やはり須佐之男命(スサノオノミコト)というのは、我々下僕とは全く違う高貴なそのまた高貴な上の方だと思うのですが、そういう方でもやはり可愛いお嫁さんをもらうときには、なんでもやって

しまう。命も惜しくないというのは我々の世界を思い返すと全く変わらない気がいたします。それだけやはり女性というのは尊い存在にあるのかなと思います。しかし本当に出雲の国というのはそういう神話が多いところですね。島根県出身の園山会員や州浜会員は幸福な方々だと思います。そういうことを思い出しながら自分の若き日をたどって、そしてこれからも我々の子供や孫にも伝える。それくらいしないと本当にいいお嫁さんは来ないのだよと私も親として伝えていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。それでは第 51 回目の例会を終わります。